

して何らかの共感・共通意識を共有する手段となっているということも、伝説の研究において考察すべきであろう。音義による発想・連想と共に、注視したいことである。

注

(1) 鎌倉末期、相州正宗の弟子で十哲の一人に数えられた初代・志津三郎兼氏(包氏)が美濃国多芸郡志津に移住、その後門弟が直江に移り、直江志津と称した。

(2) 島津久基『義経伝説と文学』一九三五 明治書院

(3) 一七八八〜一八七八。狩野派の画法を学び、有職故実・大和絵の研究を行う。考証重視・写実主義に基づきながら、内外の史実を流派・技法の別なく扱う新ジャンルとして「歴史画」を確立、明治期に活躍しながらもその後近代日本画史に埋もれた画家である。上古から中世の忠臣・烈婦を肖像化し略伝を付した『前賢故実』十卷(十一年の歳月をかけ天保七年に完成、明治元年刊行)は、当時流行し、俊英たちの多くが手本・引用とした。

(4) 『浅草寺絵馬扁額調査報告』一九九〇 浅草寺絵馬調査団

(ないとう・ひろよ／國學院大學兼任講師)

シンポジウム／伝説研究の新潮流

歴史の視点から

―「山賊」の伝説とその「系図」の創出―

佐藤 喜久一郎

一、歴史、伝説、主体、イデオロギー

伝説には主体構築の機能をもち、それを通じて歴史をつくりだすものがある。伝説の語りは、暗示や仄めかしを通じて主体に迫り、その感情に訴えてくる。伝説が「真実」として信じられるのはそのためであろう。とくに、集団の歴史を語る伝説や、特定の血管や家筋の由来を語る伝説は、諸個人にアイデンティティと歴史意識を付与して、集団に従属する主体を構築する。むろん、創られるのは自発的に語る力をもつ主体なのだが、この語り手は(私も)彼をとりまく社会的状況や、(先行する語りによって創り出された)想像的な歴史からの制約を受けている。

いずれにせよ、主体はサバルタン性(従属性)を回避できない。主体は決して、政治、イデオロギー、経済、歴史、セクシュアリティ、言語などの要素から独立して存在するわけではない(スピヴァック 一九九八)からである。

主体／「固有名詞」の歴史を描出するときには、それらの諸

要素からなる網状組織の多元性を考慮して、「厚い記述」を行わなくてはならない。とはいえ、今ここで主体一般についての「厚い記述」を行うのはさすがに難しいから（でもいつかはやるべきだ）、とりあえずは、手近な素材のプリコラージュからはじめたい。

そこで、本発表においては、私じしんにかかわる上野国の「佐藤佐太夫」と「佐藤軍兵衛」の伝説、並びに佐藤姓の由来を説いた一巻の巻物をめぐる、私のささやかな考察の一部を報告した。

二、「佐太夫」と「軍兵衛」

「佐太夫」伝説の内容は単純である。「佐太夫」という早足の「山賊」が上信国境（群馬県と長野県の境）の山（碓氷峠周辺）に籠り、その大力を発揮して往来する人々を苦しめたとか、なにか滑稽なことを行ったとか、類型的な世間話ふうの物語が語られる。

だが、佐藤家の系譜に登場する「佐藤佐太夫」は戦国時代の人物で、軍律に違反したあげく上信国境の山に籠ったということになっている。そしてじっさい、私の出自集団の一部に、「佐太夫」を初代とするグループがある。

むしろ、「佐太夫」伝説自体は、佐藤家の登場以前にも存在したようだ。私は、サダ・「碓氷貞（定）光」・「定千代」・「猿丸太夫」・「さんせう太夫」などの音的に類似する「固有名詞」の絡み合いや、多元的なイメージの連鎖と混濁によって、我々

の「佐太夫」伝説が生み出されたと考えている。「佐（藤）太夫」ばかりがサダ（タ）ユウではないことは、『宇治拾遺物語』や『今昔物語』に収録されている「佐（伯）大夫」のエピソードに明らかであろう。

上野国の佐藤家の系図（系譜も）には、実在の個人なのか、それとも何かの概念なのか、まったく判然としない「固有名詞」がいくつも記されている。「佐太夫」もその一つだが、最も知名度が高い「固有名詞」は「佐藤軍兵衛」で、この人にもいろいろと逸話が多い。

「軍兵衛」は我々にとっては一応英雄だが、人々が抱く「軍兵衛」像はそればかりではない。イメージを決定づけたのは、近世の地方軍記類であった。そこでの「軍兵衛」のエピソードには滑稽なものもあるが、印象に残るのはその畏怖すべき面である。「軍兵衛」はその力を誇示して農民を苦しめたり、富豪の家を夜討ちして略奪し一家を虐殺したりする。そして、最後には鬼退治めいたやり口で殺されてしまう。

だが、「佐太夫」を祖とする家筋があるのと同様、佐藤一族には「軍兵衛」を直接の祖とする家筋もあり、上野国ではなせか、その子孫であることが威信につながった。じっさい近代初期には、同姓同名の人物（折田「地名」軍兵衛）が政治家として活躍している（現在では軍兵衛とはこの政治家のことと考えている人もある）。中心と周縁は、常にひそかなつながりを持っているのだ。

人々が佐藤一族に抱いたのは、折口信夫がいう「ごろつき」「ぶし」への両義的イメージだったのかもしれない。「佐太夫」のイメージは宗教的職能者Ⅱ「太夫」への畏怖によって、「軍兵衛」のイメージは軍隊や兵士への畏怖によって支えられていたのだろう。それを媒介したのが佐藤姓だったことになる。

だが、問題となるのは、一連の両義的イメージがなぜ普遍的であるかに見える。「佐藤姓」に結びつけられる必要があったかということである。なにが「佐太夫」を「佐藤佐太夫」に変え、「軍兵衛」を「佐藤軍兵衛」に変えたのだろうか。

三、佐藤一族の巻物

(1)、佐藤姓の起源

佐藤姓の起源を語る巻物が、長野県軽井沢町の旧佐藤本陣文書のなかにある（この軽井沢宿の本陣は、宿の長として「佐太夫」の家筋の上位にあった家である）。転写者の無知からか、巻物には誤記が目立つうえに、意味不明の箇所が多いけれど、「佐藤佐太夫」などの「固有名詞」の意味（あるいは無意味）について考えるヒントを与えてくれる部分もある。この物語が軽井沢宿の本陣に届けられた経緯は不祥だが、私が調査したところでは、ある程度流布した文書だったらしく、物語から人物の「固有名詞」を抽出して、系図風に書き直した事例が他地域にある。物語部分を要約して以下にしめそう。

①、サヨフの神と藤白神社

宇佐へと参宮する裕明天皇（実在の天皇ではない）の一行が藤白に至った。佐藤家の先祖となる紀伊国松次郎（佐藤庄司の読み替え）も供としてそのなかにいた。藤白には「佐越池」という池がある。天地開闢の頃、イザナギ、イザナミ尊が「サヨフ」という神を儲け、その神の産湯の盥が変じたものである。「佐越池」の畔には三千年に一度しか開かないという「バシヨヲ」が咲いていた。悦んだ天皇は、神前において、「佐越の池」の佐と藤白の藤を組み合わせた佐藤の姓を、供の松次郎に与えた。

②、数万人のヤク神

松次郎の子孫は奥州へと下り、十三代を数えた。だが、十三代丹波守は「国主」と争い、二千余騎の一族を率いて流浪の旅にでることになった。一族は奥州を離れ、関東日光山へ移り、さらに「国境」の「深山」にたどり着いた。その山の「滝ノ水上」で暮らすうち、三年の月日が過ぎる。ところが、「滝ノ水上」での暮らしは不動明王を穢していた。百日のうちに「数万人のヤク神」が取り憑き、一族は皆取り殺されてしまった。

③、佐藤ダンジャウ

助かったのは、佐藤ダンジャウ貞信の夫婦だけであった。ダンジャウは「御幡」を探し、それを開き、西に向けて投げた。幡は飛んでいき、「越後国ウウ治郡赤公」（魚沼郡赤土の誤り）に落ちた。夫婦はそれを慕って尋ね下り、幡の落ちたところに住んだ。

けれども、二人の跡を継ぐものはいなかった。そこで「養子」が「名代」に立った。今の「佐藤苗字」の人々は、この「養子」の子孫である。

(2)、「固有名詞」の連鎖

この巻物の物語は、類似性をもつ「固有名詞」の積み重ねによって作られている。特に興味深い点は、「サ」の音に込められた暗示が、多元的なイメージを一定の方向に誘導している(発表では「藤」や「白」の死のイメージとの関連にも触れたが、それは別の機会に述べる)ことにある。「佐越池」、「サヨフ」という神、佐藤ダンジヤウ真信(サダノブ)といった、物語のキイとなる「固有名詞」にはすべて「サ」の音がふくまれる。

だが、「固有名詞」を結合させているのは音の類似ばかりではない。暗示の力は、「固有名詞」の背後に控える世界からも働いている。例えば、「サヨフ」という神の名は、「産用」や、産神、産所など(稲魂の「サ」ではなくて)を想起させるが、そうした想起を可能にする文化的約束事は、「固有名詞」の外にあるものなのだ。

たとえば、室町物語『明石の物語』には、熊野参詣から帰る佐藤庄司が、熊野「権現よりたまはりたる子」を「佐夜の中山」で拾い、「熊王御前」と名付けて養育するエピソードがある。この「佐夜の中山」譚も、音の類似だけから佐藤一族と「佐夜の中山」を結びつけたのではなからう。「熊野の本地」の物語

を始め、神の息子が野獣や辺境の民(野蛮人)によって養育される物語との関連を考えたい。我々の巻物の最後に唐突に登場し、佐藤一族の新しい先祖となる「養子」に、「サヨフ」や「熊王御前」との起源的同一性を見いだすことも出来るかもしれない。

しかし、こうした系譜が、熊野信仰から直接・間接に導出された想定したのではあまりにも短絡的である。例えば、よくあるように、佐藤(≡佐太夫)とよばれた人々を何らかの宗教的職能者の後裔と見なしたり、産神(と穢れの問題)やサに対する信仰の残存を想定したのでは、物語が有する主体構築的側面を見落としてしまうことになる。ゆえに、熊野信仰については、そのヘゲモニックな解釈の論理としての側面(社交辞令としての真理)に目を向ける必要がある。シニフィアンの連鎖を固定化し、ステイグマとして主体に刻み込むための正統化の論理として、あるいはアイデンティティポリティクスのための戦略として、熊野信仰が投入されたと考えたほうが適當ではなからうか。

おそらくは、無限にずれ続けるシニフィアンの流れを一定の方向に導く為に、サヨフや藤白が特権的な「固有名詞」としての位置を与えられ、そこに起源する歴史の語りが発明されたのではなかったか。さもなければ、叙述の超越的な対象である神々も、それに従属する主体(≡佐藤)も、すべて皆、無意味な「サ」の連なりの束を構成する諸要素の一つに止まり続けたたであら

う。元来は結びつきえない「固有名詞」を想像力によって接合し、シニフィアンの虚ろな類似性を意味と解釈とで満たすのが系譜(系図)＝歴史の力なのだ。

以上、私は「固有名詞」としての「私」自身の裂け目を覗いて、歴史とは異質の何かが見つかからないか少し探ってみた。だからといって自由になれるわけではないけれども、主体の「固有名詞」化の歴史を歴史化することで、私は、ささやかなりとも歴史の語り抵抗してみたかったのである。

参考文献

折口信夫「ごろつきの話」『折口信夫全集三巻』一九五五 中
央公論社

小池淳一「鈴木姓の伝承と熊野信仰」『信濃』四二巻第一号
一九九〇

小嶋博巳「ひとつの「伝承」論—イイッタエ・シキタリという
文化の正当化について—」『日本民俗学』一九三—一九九三
久野俊彦「由来」と「由緒」と「偽文書」『偽文書学入門』
二〇〇四 柏書房

齊藤純・小池淳一「歴史を取り戻すために—「伝説」という
問い—」『「口承」研究の「現在」—ことばの近代史のなかで—』
一九九一 筑波大学歴史・人類学系日本民俗学研究室
齊藤純「伝説」という言葉から—その可能性をめぐって—『口

承文藝研究』一七 一九九四

佐藤喜久一郎「歴史叙述のなかの正当と異端—碓氷峠に

おける佐大夫伝説とその由緒—」『日本民俗学』二四〇

二〇〇四

松本隆信「本地物周辺の室町期物語—明石物語ほか武家物語

篇について—」『國語と國文學』六六四 一九七九

鈴木正崇「祭祀伝承の正統性—岩手県宮古市の事例から—」『法

学研究』七七—一二〇〇四

和歌森太郎「伝説の発生過程について」『民俗学評論』一

一九六七

L. アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置

(下)「思想」五七八 一九七二

G. スピヴァック「サバルタン研究」『サバルタンの歴史 イ

ンド史の脱構築』一九九八 岩波書店

(x) どう・きくいちろう／長野大学非常勤講師